
安部公房全作品

10

安部公房全作品10

定価 700円



印刷 昭和47年12月15日
発行 昭和47年12月20日
著者 安部公房(あべこうほう)
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京808 電話(03)260-1111

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 大口製本

© 1972, Kōbō Abe, Printed in Japan

乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

安部公房全作品
10 目次

快速船 5

可愛い女 69

巨人伝説 153

城塞 217

安部公房全作品
10

快
速
船

三幕十三景

〔登場人物〕

ガイコツ

波子

ニセ物屋

詩人

詩人の女房

肉屋

肉屋のおかみ

おかみの兄

その女房

チイ子

小僧

志野

十七号の女

女記者

女議員

女民生委員

青年

その恋人

船の男

受付の女 十六号

受付の女 十八号

客 A、B、C

声

第一幕

1

——新聞記事（A）——

「世はまさに特効薬時代……人体実験流行の兆」……特効薬ブームの波にのってか、手っとり早い金もうけは新薬の発見とばかり、ネコもシャクシも奇薬珍薬の発明発見にうつつをぬかす昨今、三大メーカーでは発明受付窓口の混雑緩和のため従来の登録申請に人体実験の報告をつけ加えることにしたのは既報のとおりだが、旬日を出ずして人体実験流行の兆があらわれ、関係者を不安がらせている。

声　そやかてなあ、大きな理想のためには、少々の犠牲はやむをえんのと違いまつか。われわれも、好きこんで人命軽視しとるわけやあらへん。ほれくらいなら、あんな、なんでこんなに製薬事業の発展に寝食を忘れたりす

るもんかいな。流行流行と一口に言うが、こりゃ時代の要求いうもんや。製薬事業が、時代の花形や言われるのも、これがほんまの人類愛の発露だからですがな。つまり、機械文明が行きつまって、不平分子が社会革命せえと言いだす。ほうっておけば、人類の破滅や。私ら、この行きつまりを、人間革命で打開しよう思うとるんや。社会を変えるなんていうのはもうふるい。人間をつくりかえなあかん。たとえば、戦争に反対するより、タマよけの薬を発明するんやな。原爆に反対するより、原子病の薬を発見するんやな。腹がへつたと不平いう前に、少し食って腹がくちくなる薬を発明するんやな。この精神が分らんお人は、もう流行おくれや。社会からとり残されても、文句いう資格あらへんね、はっはっ。

——新聞記事（B）——

「特効薬審議会代表、メーカー側に人体実験取締り方を申し入れか」……人体実験の流行は、すでに本紙でも警告済みであるが、識者の懸念をよそに、猖獗（きやうかつ）をきわめ、悪徳ブローカーの横行にともなう幾多の悲惨な事例をうんだ。特効薬審議会では、新しい人身売買の基礎をつくる可能性ありとの専門家の意見をそえて、メーカー側に自粛を申し入れることになった。

声 そんなこと言うたかて、あんたら、そりゃ貧乏人の生

活権をうばうことやないか。実験されるもんが、むりやりされたいうのは困るが、自由意志なら、べつに干渉することあらへんやろ。人格は尊重せなあかん。それに日本人は実験に適しとる言うやないか。外国人がはるばる海をこえて実験しにおいでるくらいや。外貨獲得でつせえ。

——新聞記事（C）——

「人体実験の許可制、ついに本決り」……もみにもんだ人体実験問題も、政府の補助金を条件とするメーカー側の改良案を審議会がのんで、めでたく解決を見た。今後、実験を希望するものは、あらかじめ会社の認可をうけ、さらに被験者の同意書をとってからでないと、実験できなくなるわけである。なおブローカー問題については、業者の自覚にまつというアイマイな表現でぼやかされてしまったきらいはあるが、それでも明るい見とおしに向って一步前進したといわなければなるまい。

声 まあ、細かい仕組はどうでもよろし。要は立派な発明がどしどし現われて、人生の悩み、万事万端、ことごとく薬で解決できるいう、けっこうな世の中が一日も早う実現してくれることすわ。こりゃ、人類の使命でしょ

う。ちがいまつか？……へへ……

2

（某製薬会社の実験認可申込所の窓口。大きな壁、ならんでいる三つのくぼみ。左から、十六、十七、十八と番号机がかかっている。それぞれのくぼみの向うに受付の女たち、十六、十八には客がいて、なにやら一心に懇願している。正面の十七号、カードをめくり、つぎの客を呼ぶ準備をしているところ）

十七号の女 また、あの人ね！（しかし、けっして不愉快そうではない。ベルを押し、コンバクトの鏡をのぞく）

舞台裏の声 志野さん、志野さん、十七号にねがいます。

（志野登場。十七号の前に立って、頭を下げる。女、微笑む）

志野 どうでした？

（女、首を横にふる）

志野 やっぱりか、ひどいなあ……もう、七回目なんですよ。

十七号の女 だって、あんまり空想的すぎるのよ。飲めば必ず成功する薬だなんて、いくら特効薬時代でも、とつぷすぎるわ。

志野 (暗然と) 予言者、郷に入れられずさ。特効薬時代ってのは、そもそもぼくがつくりだした言葉なんですよ。十七号の女 あら、そうだったの……でも、それでクビ切られたわけじゃないんでしょう？

志野 ちがいますよ、あれはもうずいぶん前のことです。まだ研究所の下っ端のころだったけど、会社の懸賞論文に、「特効薬時代を告ぐ」っていうのを書いてね。そりゃすごい人気だったんだ、おかげで、三年間アメリカに留学させてもらってね、その間ぼくは会社に戻しするつもりで、すごく勉強しましたよ。その結果、たどり着いたのが、このメチル・トラウミキシロンだったというわけさ。特効薬の中の特効薬……最後の特効薬……ぼく、社長にもものすごくよろこんでもらえると思ってさ、いろいろひねってピューっていう、商品名まで考えたりして……

十七号の女 どこか、間違ったところがあったんじゃない？

志野 そうならそうと、間違いを指摘してくれればいいじ

やないか。たしか、アメリカン・フィロゾフィーっていう雑誌だったと思うけど、トムソンっていう有名な大学教授が、「天国を招く男」っていう見出しで、ぼくの発明を大々的に紹介してくれたんだ。そしたら、社長は、わざわざ祝電をくれたんですよ、「これこそわが社の事業精神の結晶だ」なんて……ところがそれっきり、急に誰も彼もがそっぽを向きはじめてね、戻ってみたら、待っていたのがハトロンの紙の封筒に入った解雇通知じゃないですか……まったく、わけが分らん。

十七号の女 きつと誰かのうらみを買ったのね。

志野 しかし、なにも、クビにしなくたって……いや、すんだことはもうよしませう。でも、せめて実験の許可くらいは、くれたっていいんじゃないかな。

十七号の女 楽じゃないわよねえ、こう競争が激しいと……

(間)

志野 (砲をかかえなおして) でも、ぼくはあきらめませんよ。また幾度でも来てみます。

十七号の女 (厭味を感じさせないように) そうね、かならず望みがかなう薬を発明した人が、あきらめるわけにはい

かないわねえ。

志野 (立ち去ろうとしながら、うなずき) そうですよ。

十七号の女 ちょっと待って…… (声をひそめ) 私、お役に立てるかもしれないですよ。

志野 ……………?

十七号の女 もし、実験に、本当に自信を持っているんだつたら……

志野 持っていますとも。

十七号の女 (こっそり何か、紙片に書いて差出し、あたりを警戒しながら) 早く、しまつて……あなたつて、母性本能を刺激するタイプね……

3

(ネズミ横丁。二階建てのバラック、二階に行く階段は、外に付いている。手前はちよつとした空地。背景にコンクリートの堤防。船の汽笛。対岸から、工事場の音。階下でガイコツがボクシングの練習している。階段のわきに、「人体実験幹旋。どんな相談にも応じます」という看板。正面からは見えるが、下手からはカゲになって見えない。下手から、十七号の女と志野登場)

志野 (看板を見上げ) あんな看板、おおっぴらに掛けたりして、大丈夫なんだろうか?

(上手から、リヤカーを押して波子登場)

十七号の女 (波子に) ネズミ横丁つて、このあたりでしよう?

波子 (うなずき) 島田さんなら、この二階よ。

十七号の女 (警戒気味に) どうして、そんなこと……

波子 (ごく自然に) だつて、お客が尋ねて来たりするのは、この辺じゃ、島田さんのとくらしいものどもの。

志野 でも、運がよかつたですねえ、一度も迷わずに、まっすぐここに辿りつけて……

十七号の女 本当、夜でなくてよかったわ。途中、ずうつと、道を聞くところも無いしまつでしよう……

波子 平気よ。そのつもりになつて歩いていれば、しぜんとここに来てしまうことになっているの。(窓に向つて)

父ちゃん、島田さん、いるかしら?

ガイコツ 朝から出たつきりのようだが、(窓から顔を出し) 間もなく、戻ってくるころじゃないかな。

十七号の女 (志野に) じゃ、待たせていただこうかしら? 波子 上にあがると、海が見えて、景色がいいわ。

(志野と十七号の女、階段を上っていく)

波子 もう出かける？

ガイコツ まだ、時間があるが……久しぶり、いっしょに、町でも歩いてみるか。

波子 (リヤカーを引いて、駆け出しながら) すぐ戻るわ。

(退場)

十七号の女 (海に向って) まあ、きれい！

志野 本当に、感じのいい娘さんだなあ。

十七号の女 ……………

志野 (間違いに気付いて、弁解がましく) でも、やはり、よく分らないんだなあ。その男が、いくらうまく許可証を偽造してくれたって、要するにもぐりはもぐりでしよう。

一応、世間や監視員の眼はごまかせても、会社までごまかすわけにはいかないんじゃないかな。

十七号の女 もちろん、ごまかせないわ。

志野 じゃ、だめじゃないの。

十七号の女 大丈夫だったら。成功しさえすれば、見て見ないふりよ。社長だってべつに、本気で実験をとりしまろうなんて言うつもりはないんだから。

志野 そうかなあ……

十七号の女 しっかりしてよ、夢を実現させる薬を創ろうって人が、そんな気の弱いこと言って、おかしいわよ。

(間)

志野 (落着きなく、匂いをかいで) おや、どこかでコロッケをあげてるな。肉屋らしい。コロッケっていうのは、独身者には、便利な食べ物ですねえ……ちよつと行つて買つてこよう。

(志野、階段をおり、上手奥に退場)

十七号の女 (腹立たしげに) ……嫌んなっちゃう。私って、どうしてこう、変り者ばかり、つかまされちゃうんだらう。

(ふたたび、ボクシングの練習しはじめているガイコツ。

ニセ物屋の島田、なにやら興奮の態で登場)

ニセ物屋 (窓からガイコツに呼びかけ) 油断も隙もあつたもんじゃねえ、広い世間にや、このおれをだまそうってえ、あつかましい野郎がいるんだからねえ。驚きましたよ、いや、驚いた。

ガイコツ（呆れ顔で）あんたをだますだつて？

ニセ物屋 ほら、いただろうが、肥える薬だとか、色の白くなる薬だとか、変なものを沢山こさえやがつて、おっさんも二、三回実験台になってやった、あのアメ屋の禿おやじよ。あの野郎、道楽がすぎて、おれにも散々借金をつくりやがつてさ、仕方ねえから、体で返せつてんで、それ、橋の向うの薬屋の隠居、あれがハゲの薬にこつてやがつてねえ、で、ハゲの野郎、そこに世話してやつといたらよお、おめえ、ふてえじゃねえか、いつの間にかほかの周旋屋の口車にのつて、さつさとまわしをとつてやがるのよ、おまけに、同じハゲの実験台でさあ。

ガイコツ そりやそうと、お客らしいよ。（と二階を見上げる）

ニセ物屋 え？（サイコロをふつて）丁と出た、女か？

ガイコツ 両方だよ。

ニセ物屋 なんだろうな？（モミ手しながら、階段のほうへまわつて）はい、こらっしやこ。

（二階の入口のあたりで、なにかしきりに話し合ひはじめるニセ物屋と十七号の女。しかし、声は聞えない。

波子と志野が、上手から戻ってくる）

志野（コロッケを食べながら）そう……君はあの店で働いているの。

波子 ほとんどおろし専門でしょう。安いから、わりに売れるんだけど、運搬が大変なのよ。

志野 君が運搬係か……でも、暇らしいじゃないの。

波子 ちがうわ、今日は、私の誕生日で、おまけに日曜でしょ。特別にお暇もらつたのよ。年に一度のお休みよ。

志野 君、いくつ？

波子（笑つて答えない）

ニセ物屋（二階からのぞいて）おや、お戻りになつたようですよ。

十七号の女 志野さん、早く上つていらっしやいよ。

ニセ物屋 いや、下に参りましょう。善は急げだ、早速実験台を見ていただくことにして……

（ニセ物屋と十七号の女、階段をおりてくる。同時に、下手から、空気銃と袋をもつた詩人登場）

詩人 しっ！

（志野と波子を制し、銃をかまえ、上手をねらつて撃つ。猫の悲鳴……詩人、駆け出して行く）

志野 (詩人の袋に近づきながら) なに、あの人……?

波子 詩人よ。

志野 詩人?…… (何気なく、袋の中をのぞき、叫び声をあげてとびのく) ネズミの死骸だ!

波子 (平然と) ネズミよ。

十七号の女 (うながして) 志野さん、島田さんよ。

志野 (呆然と) ネズミだ……

十七号の女 (ぎょっとして、思わず階段に駆け戻り) ネズミ?

ニセ物屋 なあに、鉄砲の名人でね、倉庫会社と契約して、毎晩撃ちに行ってるんです。

(詩人戻ってくる)

詩人 くそ、逃がしちゃった。年のせいだねえ……

ニセ物屋 (詩人に) 気にしない、気にしない、おまえさん運がいいよ、ほら、お客さんだぜ。

詩人 (うれしそうに、頭をさげて) はいはい、これはどうも。

ニセ物屋 (ガイコツに) おい、おっさんもうだいたい、一つ、

テストを受けさせていただいたら?

ガイコツ あと一時間くらいで、出かけんとならんが……

志野 (急いで) 一時間あれば、十分です。

ニセ物屋 (見まわし) あとは、誰がいるかな?

詩人 女房のやつも、呼んで来て、かまわんだらうか?
ニセ物屋 いいとも、いいとも。

(詩人、上手に駆け去る)

ガイコツ 波子、先に行くかい?

波子 待ってるわ。

志野 どこか、部屋をお借りできるといいんだけどな。

ニセ物屋 (当然のように、ガイコツの小屋のドアを開けて) さ、どうぞどうぞ、ご遠慮なく。

(一同、つれだって小屋の中に入る。

肉屋の小僧が、うしろをうかがいながら登場)

小僧 (波子に) ねえ、町に出たら、ついでに封筒を買ってきておくれよ。

波子 封筒なんて、紙を切つてつくればいいじゃないの。

小僧 ちがうんだ、ほら、ふちに模様がついてて、香水を

つけたやつがあるだろ。

波子 おかしいわ、男のくせに。

小僧 いいんだってば…… (十円玉をいくつか差し出す)

波子 (笑って受け取る)

（詩人、女房といっしょに戻ってきて、いそいそと小屋に入っていく。女房は、庖丁をにぎったまま。それを見て、思わず後ずさる志野）

詩人の女房（急いで庖丁をわきに置き）すみませんね、仕事の途中だったもので……

ニセ物屋　では、はじめていただきますかな。さし当り、この三人ですがね、お気に召したのがいなかったら、すぐにもほかに御案内いたします。お客さんから、まず、菓の作用について、ご説明していただいて……

志野　ええ……一言でいうと、飲むと望みがかなう菓、つまり、夢がそのまま実現する菓なんです……

（一同、嘆声、あつけにとられたような表情）

ニセ物屋　へえ、こいつはうまいこと考えた……それで（見まわして）どういうタイプがよろしいんでしょう、男、女、肥ったの、瘠せたの……

十七号の女（志野に耳打ちして）丈夫なのじゃなきゃ駄目。少々の副作用じゃ、へこたれないように……

志野　それは、実際にテストしてみたらじゃないと……（急いでポケットから薬ビンを取り出し、丸薬を一つずつくばっ

て）とにかく、これを飲んでみていただけませんか。

詩人　飲んだら、どうなります？

志野　そう……つまり、皆さんも、いろいろと、夢を持っているでしょう？　でも、毎日、いろいろ心配事なんかがあつて、その夢がぼやかされたり薄められたりしちゃいますね。ところが、このビューという薬は、そうした夢を、煮つめるような作用をもっているんです。凸レンズが光を集めるみたいに、ビューは夢を集めるレンズなんです。学問上では大脳皮質の選択的興奮による精神凝縮作用っていうんですが……だから、これを飲むと、かならずなにか夢を見るはずですからね。その夢の内容を話して下さい。大きくて、しかも一番可能性のある夢を見た方を採用させていただくことにします。

ガイコツ　それで、仮に採用になったとして、あとは一体……？

志野　あとは、毎日、一日一錠……

詩人　そして、その結果は？

志野　そら、水蒸気つてのは、目に見えないでしょう。ところが、冷えると、水滴にかかりますね。あれと同じところが、脳の働きの上に起るんです。つまり、心のねがいも、凝縮し、煮つめていくと、しまいいはそのまま現実